

沖繩浦島・不易沖繩

藤崎康彦

二月末にほとんど三年ぶりに那覇を中心として沖繩に行ってきた。事情があつて、この三年近く沖繩に限らず旅というほどのことができなかったのだが、その間の様々な変化は大きく、この度の沖繩行でも今浦島のようなとまどいを感じるが多かつた。

沖繩以前にまず、空港でおろおろしてしまふ。最後に飛行機に乗ったときは「チケットレス・サービス」の時代で、オンラインで予約をしたときに使ったクレジットカードを空港の発券カウンター傍の機械に通すと、搭乗手続きと搭乗券の発券が同時に行われるものだった。ちゃんとその「搭乗券」を持って手荷物検査に向かった。ところが、今回はオンライン予約の時から何か勝手が違う。若い人がよくケータイで撮影して何事かしている「2次元バーコード」が表示されて、これを使えばサイトの画面はいう。ケータイのカメラ機能など使ったことはないからプリンターで印刷する。バーコードの脇には管理には気をつけよと注意書きが書いてある。ただのぺらぺらの紙の上の小さなシミをどう管理しろというのだろう。不安でしようがない。

空港では以前と同じような機械があつたが、様子が違う。あの小さなバーコードを読み取り画面に押しつけるようにする。何か電子音がして、私の予約内容が表示され、搭乗手続きは終わったという。搭乗券が出てこないで、落ち着かない思いで手荷物検査に向かう。そこにも小さな読み取り機があつて、やはりバーコードを読み取らせる。

今度は搭乗口案内が小さなプリントアウトで出てきて、それを持って検査ゲートをくぐる。最後は搭乗口だ。以前は搭乗券を鉄道の切符のように機械に差し込むと、反対側から半券が出てきて係員が渡してくれた。今回は頼りない紙の上のバーコードを搭乗ゲートの三回目の読み取り窓に押しつける。即座に薄い紙の搭乗券が出てきてそれを係員から受け取る。初めてのこと故もたすと人に迷惑をかけると思い、列の後ろについたのだが、やはり何かうまくいかない人もいるらしく、列はしばしば止まり、係員がお世話をしていた。機内の席に着いたときにはほっとした。これではまるで、飛行機に初めて乗るお上りさんみたいではないかと思ったのだが、システムの変化に未知のものに対するようなとまどいと不安を感じる点では、まさに同じなのだろう。年をとって、初めての物事への適応力が低下している。問題となる変化は、外側よりも私自身の側の方が大きいかもしれない。

沖繩そのものには空港でのような不安は感じないものの、着いた途端におやと思うことが多かった。那覇に着いたのは日曜の夕方だったが、国際通りで三年前はなかった歩行者天国をやっていた。原宿あたりで見ると、ゴシックロリータなのかお姫様ファッションなのか私には分からないが、飾りの多いブラウスと襷の多いスカートを着た女の子がひらひらの日傘を差してグループで練り歩いていた。これは地元の子だろう。

国際通りを散策してみると、以前の店がなくなったり新しくできたりして、結構変わっている。しかしこれはどこの地域の街でも普通にあることだ。今回特に目に付くのが「アグー」と呼ばれる沖繩在来種というか固有種というか、そういう豚を売り物にしているレストランや沖繩料理屋などの看板だ。戦前の農家はほとんどどこでも家でこの固有種の豚を飼っていたらしいが、それらは沖繩戦の砲撃とその後の食糧難で絶滅したといわれていた。しばらく前から、どこかに残っていたものを種豚にして繁殖させる努力がなされていたらしい。それにしても突然の出現だ。「幻の豚」とどこの店でも麗々しくうたっている。豚の幻が立ち現れてくるような変な気がする。これも同じく至る所で宣伝されている「石垣牛」あるいは「八重山牛」のステーキなどと同じく、観光客向けの目玉

なのだろう。歩きながら、かつての、都会でしか売っていない「魚沼のコシヒカリ」と同じで、生産量よりも流通量・消費量のはるかに多い代物なのだろうと思ってしまう。

しばらく前から、土地の若者などに人気のしゃれた繁華街は、郊外の「北谷」方面に移っていた。近年はさらに那覇でも天久地区が「新都心」として整備されて人出がある。それで一時は国際通りも寂れていた。今回は前回のうらぶれた感じはかなり修復され、観光客で夜遅くまで賑わっている。(私の予約した国際通りのホテルも三年前はなかった。ずいぶん前に九州資本のデパートが撤退して、あとはしばらく更地になったままで、そこで屋台のテント村のようなのをイベントみたいに若者がやっていたりした。通りでも一等地のその場所に昨年だかにできたばかりのホテルだった。)

しかし、何かが微妙に違う。観光客以外の地元の人が、夜の通りを歩く人の中にいないようなのだ。もちろん観光客目当てのお店の人たちは地元の人だろう。しかし、国際通りには観光客とその相手をする人たちしかない。散策している、街の賑わいを楽しんでいる人たちに、観光客以外はあまりいないようなのだ。

八〇年代の中頃、夜、大きなアメ車に白人の男が一人で乗って、カーステレオのボリュームを上げて国際通りをゆっくりと走っていた。宿舎にいても退屈な米兵なのだろう。「奇跡の1マイル」の端に行くことUターンして戻ってくるらしく、さつきとは反対の方向に走っている。それをずっと繰り返し返しているらしい。ちょっと怪しいアメリカン・グラフィティだ。夜の十二時近くなっても、制服の高校生はおるか中学生らしい少女まで、国際通りを友人たちと声高に話しながら往き来している。もちろん男の子も多い。沖繩の少年は高校生ともなると立派なひげを蓄えている子もいた。学生服姿の美髯が鞆を提げて悠然と深夜近くの街を歩いているのは、私にとって最初の沖繩訪問の頃だったせいかな、違う国に來ているような不思議な気持ちにさせた。そういう感じが、今回はまるでない。きつと北谷や天久に米兵も学生も行ってしまったのだろう。(そういえば、老いも若きも夜が遅い沖繩だから、朝も

遅い。その頃の平日の朝七時の国際通りは、バスが走っているだけで車も少なく、歩道を歩く勤め人の姿などはあまり見ず、閑散としていた。日中や夜の混雑に比べてのこの白けた活気のなさにも、非現実的な時空に迷い込んだようなめまいを感じた。

国際通りをちよつと脇に入っても変化は感じられる。沖縄はたばこや酒などの自販機が少ないと十年くらい前までは土地の人も言っていた。マチャグアーといわれている雑貨屋のような小さな店がそこにあり、夜の遅い沖縄の人々の起きている頃まで開いているのだそうだ。なにもわざわざ自販機で買う必要はないのだ。ところが、夜遅くまで開いていて、数年前まで私も立ち寄ったことのあるいろいろな店が今はなくなっている。酒屋はあるが、店には宵の口でも既に明かりはなく、代わりに店の前には自販機が沢山置いてあった。バーのように夕方から店を開ける、郷土資料を探したことがある古本屋もなくなっていた。脇道は人通りもなく暗く静かに眠っているようだ。マチャグアーは那覇市内には少なくなつたが、その代わり本土資本のコンビニが目につくようになった。なぜか国際通りとその周辺はローソンが多い。本土のチェーン店のような店は食べ物屋にも多く、あちこちにある。

ぶらぶら歩きでも表面的な変化にはいくつも気づくことができる。それらは、たとえば国際通りはほぼ完全に観光客のためだけの人工的な特殊な場所になつてしまつて、土地の人たちも出かけてくる場所ではなくなつたとまとめられるだろう。いわば外来者の幻想に奉仕するだけの街だ。沖大の先生と話していたときにも、自分たちはもういかなんと言われたので、それは土地の人にはつきり意識されているのだろう。

しかし、ちつとも変わっていないなあと感じることもまた多かつた。それは沖縄自身が変わっていないということと、観光に来る大和人（ヤマトンチュー。沖縄の人は内地の人をこう呼ぶことがある）の姿勢や沖縄へのまなざしなどが変わっていないということと、二つの面がある。それぞれのほとんど無意識の深いところにあるなにかであるのかもしれない。

四、五年前だかに那覇市内に開通したモノレールは、観光客にも市民にも今は便利な足になって結構混み合っている。二両編成で小さく、おとぎの国のおもちゃの乗り物のように、立て込んだコンクリートの家々を見下ろしながら、しずしずと走る。空港からそれに乗って来た観光客の若い娘が、市の中心部に近づいたあたりで頓狂な声を上げた。「信号があるじゃん!」。連れの娘が「え、なんで?」と驚いて聞き返す。「だって沖繩には信号がないって言ってたよ」

娘はどこかで読んだか、誰かに聞かされたかしたのでだろう。しかし一九七二年の「本土復帰」後、一九七八年にそれまでのアメリカ式の車両右側通行を本土式の左側通行に改めたとき、交通信号の切り替えを一齐に行う「大戦」があったことまでは教えてもらえなかったのだろう。大和人は沖繩と沖繩人（オキナワンチャー、あるいはウチナーンチャー。大和人に対して自らをこういう）に何かとんでもない幻想を投影するらしい。それは昔からずっと変わっていないようだ。最近では「癒しの島」としての沖繩本島や離島に「移住」と称して退職後の大和人などが住もうとすることが多くなっているようだ。それも幻想の一つだろう。沖繩自体が移民を多く送出した、別の意味で「移住」者の島なのだが。

沖繩人自身も、方向は異なるが同質の幻想を自らと大和に抱いているところがある気がする。しかしそれには今回は触れない。それとは別に、彼らの中での「自と他」の関係のあり方についても、沖繩人自身が特に意識していない態度のようなものが変わらずにあると感じる。今浦島を感じる不易沖繩には、たとえば次のようなことがある。沖繩は本島も離島も、様々な精神的・感情的・行動的な混乱を示す人、いわば内地の都会ならば精神科受診を勧められるであろうような人々に対して、比較的寛容であるといわれてきた。二十年以上も前だが、土地の人も観光客も多く行き交う国際通りに一人で座り込んで、道行く人に語りかけるといわけでもなく（しかし時折語りかけているようでもあったが）訳の分からないことを言っている、身なりの整わないおばあさんを私も見かけたことがあ

る。路傍の石のごとく無視されているのではなく、地元の人たちは、認めた上でその人のやりたいうようにさせているという感じがした。このように地域あるいは血縁共同体レベルでそれらの人を含み込んで見守ってきたともいわれる。(そういう点では私の生まれ育った新潟県の小都市も、似たようなところがあつた。精神障害と言うより知的障害のおばさんが、垢でてかてか光っているような着物を着て橋の袂の道に立つてぶつぶつ独り言をつぶやいていた。学校帰りにいつも見かけている私たち小学生には、少し怖いけど友達みたいな感じがあつて、からかつて囁し立てて怒られたりした。ランドセルを揺らせて一斉に逃げた。しかし危険な感じは抱かないし、大人からも嫌悪や否定的な感情を植えつけられたりはしなかった。)

沖繩では、少し異なる様子を示す、特に感受性の鋭さを示すように思われる人々は、共同体の人たちに「特別な生まれの人」(サーダカウマリなどといわれる)と見なされることがある。その特別な感受性故に、カミの働きかけを受けているので、混乱しているのであると解釈される。この、病気のような状態(カミダーリイなどといわれている)によつて、普段本人も周りも気がつかなかったその特別な「生まれ」が、そのとき明らかになったのである。こういう人からユタといわれるシャーマン的な宗教的職能者が「生まれ」てくる。この「生まれ」とは、それまで存在しなかったものが新たに生まれるのではなく、もともとそういう生まれの人が困難なエピソードを通じて、晴れてその存在を周囲に認められることを意味するのである。従つて、こういう人がユタに「なる」と書くとき沖繩的発想からはずれることになる。「なる」のではない。初めからそう「である」のだが、それに気づかなかつただけだ、ということと文化的に理解するのである。宗教人類学者の池上良正氏はこの辺の感覚を捉えて、沖繩は「生まれの文化」だと言っている。

私には「生まれ」に対するこのような態度が、沖繩のG I D (性同一性障害)の人たちに対する態度にも影響しているような気がしていて、その社会的受容の(他地域との)差の有無に関心を抱いていた。沖繩にもG I Dの人

たちが少なくないようだが、医療を受診するG I D患者はG I Dの人たちのすべてではない。従って、そういう人たちの実数はわからないのだが、医師の話では日本の他の地域より患者は多いようである。またなぜか患者としてはFtM (Female to Male: 身体は女性で、性自認は男性であり、男性としての社会生活を志向する人たち。あるいは外性器など身体を変える「性別再指定手術」を受けた人たち。俗にわかりやすく男の意識が間違えて女の体に閉じこめられているという言い方をする場合もある。逆はMトFである。)が(遙かに)多いという。

社会的困難を抱える人たちを支援するN P Oのスタッフで、G I Dの人たちとも沢山接触がある人の話を、今回短い時間ではあったが聞くことができた。若い人でジェンダーを変えたりしても、クラス会などに普通に出て、あの人は女(あるいは男)なんだよと新しいジェンダーで皆は受け入れてくれるらしい。子供でジェンダー表現が異なる(例えば反対の性の服装を好むとか、同じ性の子供と遊ばないとか)ことがあっても地域はあまり問題視しないようでもある。

「女から男になったといってもあまり気にしないわけね」とうっかり言ったら、同席していた沖縄人の医師にかさず「なるんではない、初めからそうなんだ」とつつこまれた。もちろんそれは分かっている。私が言いたかったことは「気にしない」あるいはそういう方を容認することの方だ。と同時に、G I Dは「初めからそうなんだ」というこの認識は、ユタなどが初めからそういう霊能の高い特別な「生まれ」の人なのだという認識と質的に同じであるように私には感じられることだ。この認識が、G I Dに対する周囲の態度を「ああ、そうなんだ」という感じで受容的にしてくれるのではないかと思う。そうであるとするなら、これは沖縄文化の深いところにある昔からの価値観で、それが極めて現代的な新しい現象にも自然に適用されていることになる。こういう意味では「生まれの文化」は不易なのだろうと感じた。